

明末の文学研究

長内佑希

近代中国における新文学運動の旗手の一人、周作人は1932年、輔仁大学で行った講演「中国新文学之源流」のなかで、明末の公安派を新文学の源流として高く評価し、明末の公安派と1919年の五・四運動に始まった新文学とは共通する、と見なした。

中国の近代化が文学の領域にまで波及したときに、清代を超えて振りかえられた明末の公安派とはどのようなものであったのか。本稿では、公安派の出現までの過程と、公安派の文学論を論じる。

明代中期、王陽明があらわれた。当時、いわゆる程朱学派の理学が天下を風靡していた。宋儒は『大学』に見える「格物」を「物に格^{いた}る」と読み、すべての物事には道理が含まれているので、その道理を一つ一つ明らかにしていくことで万物を貫く大きな一つの道理を知ることができるようになる、と考えた。外に道理を求め、こうした考えに対して、王陽明は「格物」を「物^{こと}を格^{ただ}す」と訓んだ。彼は「人は天地万物の心なり。心は天地万物の主なり」（『王文成公全書』巻6、「答季明德」）と述べ、本来、人は心の中に宇宙万物をまるごと包み込んでいると見なした。彼は人間から外部の世界まで、すべてが自分の心中にある固有の理の具体的な表現に過ぎない、と考えたのである。

さらに王陽明は「父を見れば自然に孝を知り、兄を見れば自然に弟を知り、孺子の井に入るを見れば自然に惻隱を知る。此れ便^{すなわ}ち是れ良知にして、外に求むるを仮^からず」（『伝習録』巻上、「徐日仁所録」）と述べた。外に求めなくとも心のうちに本来あるもの、これこそが「良知」である、と考えたのである。

王陽明の「良知」は、根本的に理学者の「天理」の絶対的地位を否定し、個人の主体的な意識の萌芽と地位の向上を示唆しており、良知をもつという点で人々は平等であるとする価値観を持つ。「良知」説は簡便な教えであったため、士人だけでなく、あらゆる職種と階層の人にまで広まった。

王陽明の没後、王学はいくつかの派閥に分かれたが、その中に良知現成派がある。彼らは人の欲求を肯定し、個性を追求した。良知現成派の思想は王学の発展を推進し、かつ時代の風潮に適合して大いに流行し、ついに明末の世を風靡した。

良知現成派は民衆の欲求や生活に同情し、堅苦しい伝統や名教の束縛から人間を解放しようとした。しかし心の自然を尊び、学は心に悟るのみとして修行を無視し、情を過剰に重視した結果、ついには道徳を軽視して、社会を乱すようになった。

良知現成派の末に李卓吾があらわれ、「夫れ天は一人を生ずるに、自ら一人の用有り。給を孔子に取りて後に足るを待たざるなり」（『焚書』巻1）と述べている。人はみな個人の有用性を持ち、孔子の教化に染められてはじめて一人前というわけではない、というのである。また「田に服するが如き者は、其の秋の獲を私して、しかる後に治田^{つと}に必ず力む。

…然らば則ち無私の談を為す者は、皆画餅の談」(『蔵書』巻24、「徳業儒臣後論」)といい、人における「私」を肯定した。

李卓吾の文学観念も、果敢に伝統的束縛に挑戦し、個性の素直な流出を重視する。彼は「童心説」(『焚書』巻3)の中で、「天下の至文は、未だ童心より出でざる者有らざるなり」という。彼は天下最高の文学は、すべて作者本人の情感と欲望を素直に表現したものである、と見なしたのである。彼はこの「童心説」によって、戯曲小説を詩文と同列に並べて評価した。

詩文の面では、明代の中期、李夢陽を代表とする「前七子」による文学復古運動が行われた。李夢陽は、「今の文」は宋代の理学の影響を受けて、個性をもった人々が、ただ伝統的道德に当てはまるように文を書き、「其の人を文にし、其の人の如くにす」る古代の精神を失っている、という。(『空同集』巻66、外篇、論学上篇第五) 宋代以来の主理の文学を拒否した李夢陽は、「詩は、吟^{うた}の章にして、情の自ら鳴る者なり」(『空同集』巻51、「鳴春集序」)と述べて、真情の表現を重視した。そして彼は、「文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐」(『明史』李夢陽伝)という復古運動を始めた。彼は「文には必ず法式有り、然る後に音度に中^{あた}り諧^{かな}う」(『空同集』巻62、「答周子書」)といい、復古運動は典型的古さを尊ぶのではなく、文学の法則の自然な具現が、そこに存在するので学ぶ必要があり、そのため古人の法則を学び、それを守り続けてこそ、始めて変化して個性が生じるとした。

李夢陽は、主に杜甫に学んだが、典型と措辞の固定によってどの詩も同じ主題の繰り返しのよう印象を感じさせる。これは古文辞の詩人たちに共通した弊害となった。

李夢陽の死後、嘉靖年間(1522-1566)の中期、李攀龍と王世貞を指導者とする後七子が、再び文学復古の運動を開始した。典型への合致が文学の唯一の道と見なす主張は、李夢陽よりもいっそう強く推進された。

李夢陽ら前後七子による文学復古運動の流行は、文学に対する市民の欲求の盛り上がりを表している。李夢陽は「文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐」といい、典型とされた時代以外の多様な知識教養を切り捨てて、明代の経済発展によって新しく誕生した市民たちに最短の詩文学習のルートを提示した。思想界では王陽明が王学を創成したのと同様に、詩文の世界では李夢陽が主導した古文辞が市民の欲求に応えたのである。

16世紀、古文辞から文学制作の典型を示されて、詩文を作成してきた市民たちは、実力を蓄えるにつれて典型の拘束を窮屈に感じるようになっていった。そして次の時代に李卓吾と公安派の、個性と自由を重視する文学論が現れると、大きな反響をもって迎えらるることになる。

公安派とは、公安県(今の湖北省荊州市公安県)出身の袁宗道(字は伯修)、袁宏道(字は中郎)、袁中道(字は小修)の三人兄弟を中心とする詩派である。公安派の代表、袁宏道は、「性靈説」を主張した。彼の「小修の詩に叙す」(『袁宏道集箋校』巻4)にいう。

大都独り性靈^{おおむね}を抒^のべ、格套に拘らず。自己の胸臆より流出するに非ざれば、肯^あえて筆を下さず。…即^{たと}い疵^あ処^あなるとも、亦た本色独造の語多し。然うして予は則ち極めて其

の疵処を喜ぶ。

性霊とは、精神や魂のことである。それが素直に表現されたならば、たとえ好くない部分でも個性があるとして、袁宏道は高く評価する。

袁宏道は反古文辞の意思をもって「性霊説」を主張したが、秦漢の文・盛唐の詩を全面否定したわけではない。彼は、各時代の詩文は時代によって盛衰変遷し、詩文の法は時代によって固有のものがあるとし、「原より優劣を以て論ずべからず」（「小修の詩に叙す」という。また各時代の法も、前の時代の弊を矯正するために生ずるとして、詩文の時代変遷論ともいうべき主張を唱えた。各時代の詩文のなかでも、袁宏道は個人的な趣向から、白居易・蘇軾の閑適を愛好した。彼の詩の内容も自由平明であった。

袁宏道は、巷の婦人や子どもたち、彼らのうたう擘破玉・打草竿の俗謡の類いは、「無聞無識の真人」が作ったものであるため「真声」が多い、と高く評価する。（「小修の詩に叙す」）しかし他方では蘇軾の学問見識をも高く評価している。この態度は公安派に大きな影響を与えた李卓吾と共通する。彼らは学問を否定するものではなく、当時の士大夫が典型に縛られていることを批判するものであった。

公安派の性霊説は、古文辞に替わって大いに流行したが、後には「諧謔嘲笑、間ま俚語を雑う」（『明史』巻288、袁宏道伝）る詩風になっていく。それは袁宏道自身の嗜好と、時代の趨勢としての戯曲小説との同列化による、詩文の立場の相対的な低下のためであろう。

市民たちは典型への学習を終えると、かえってその束縛を望まず、公安派の自由な感性の表出を支持するようになった。そしてそれは、公安派を代表する存在である袁宏道の趣味的愛好に沿うようになり、性霊を重視するあまり表現力の希薄な、悪ふざけに似た詩風となっていった。かくして性霊説は次の時代に批判されて、その流行は終息する。

明代は経済が伸張するにつれて市民層が力を持ち、個人を重視する革命的な陽明学が生じ、さらに同時期、詩文の方面では古文辞派の復古運動が始まった。その指導者である李夢陽と王陽明は袂を分かったが、古文辞の隆盛が、約一世紀の後に王陽明の思想を過激に発展させた李卓吾に影響された公安派に打倒される、という一事が明代の特徴をよく表している。明代の文学の特徴は市民化にあり、それは束縛を拒否し、個性の自由な発露を欲するものであった。

古文辞派も公安派も、真情の表出を重視した点は共通する。公安派には、自由で開放的な近代的思想があったものの、残念ながら行き過ぎて弊害とされ、消滅する。しかし公安派の個性を重視する主張や作詩文の態度は、近代になって周作人や林語堂に再発見され、再び甦ることになる。彼らの説は時代を先取りしすぎたか、或いは中国における儒教の歴史が長く大きすぎて、それを超えることができなかつたのであろう。

※卒論は、第一章 経済の繁栄と都市文化の形成、第二章 王陽明の哲学と李卓吾の童心説、第三章 明代中・後期の文学復古運動、第四章 公安派の文学運動、から成るが、字数の関係上、第一章を除いた第二章以下を要約して記した。